

V3.2 態拡張12方式

原動詞から新動詞が生まれた様子を12方式に分けて説明します。

奈良時代には母音に甲類音と乙類音の区別のあるものがありました。
本書では，必要な場合に *ī* や *ë*, *ö* で乙類音であったことを表します。
(B6.3参照)

動詞は元来，自動詞，他動詞の区別・認識はなかったものと考えられますので，「原自動詞」「原他動詞」というのは便宜的な分け方です。

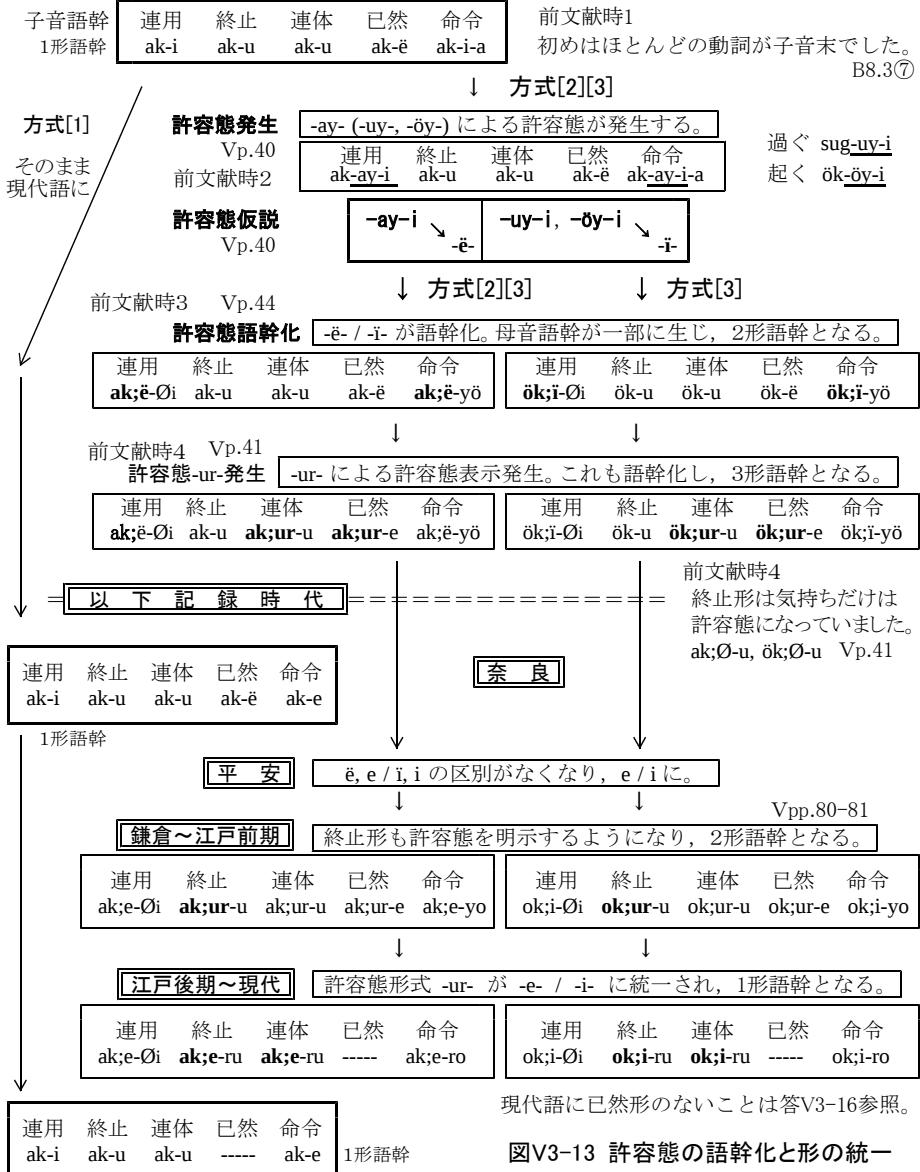
V3.2 態拡張12方式

右ページの表参照

下記「Vp.○」は「本書p.○」の意味

許容態の語幹化と形の統一

方式[1][2][3]の歴史を概念図で示しておきます。Vp.82



方式[1]～[3] は次のようなものです。

方式[1] 無変化 ……古代から現代まで動詞に変化がありませんでした。左ページの図中には「開く ak-」を例として掲げました。本書pp.52-53

方式[2] 自他逆転……動詞に許容態 -e- が付き、自動詞・他動詞が相互に逆転しました。図中には「開く ak- → 開ける ak;e-」を例として掲げました。本書pp.54-55

方式[3] 自他補強……動詞に許容態 -e- / -i- が付き、現代語的感觉から見て、自動詞はより自動詞らしく、他動詞はより他動詞らしくなりました。図中には「起く ok- → 起きる ok;i-」を例として掲げました。本書pp.56-59

左ページの図を理解するために、次の表を掲げておきます。(表V3-13と同じ)

表V3-6 方式[2]の例 原動詞「開くak-」→ 現代語動詞「開けるak;e-」

原自動詞		ak-（開く）				
		連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
推 定	前文献時1	ak-i	ak-u	ak-u	ak-ë	ak-i=a
	前文献時2	ak-ay-i				ak-ay-i=a
	前文献時3	ak;ë-Ø	ak;Ø-u	ak;ur-u	ak;ur-e	ak;ë-yō
	前文献時4					
以下，文献記録時代						
3 語 幹	奈良時代	ak;ë-Ø ak;e-Ø	ak;Ø-u	ak;ur-u	ak;ur-e	ak;ë-yō ak;e-yo
	平安時代					
	2 語 幹		鎌倉時代	ak;ur-u		
室町時代						
1 語 幹	江戸・前期					ak;e-ro
	江戸・後期					
	現代	ak;e-Ø	ak;e-ru	ak;e-ru	(なし)	

★命令形は、連用形に a が付いた形からできたもの、という説に基づきます。

★記号「;」は態詞が語幹化したことを表しています。本書p.44参照。

★形態素 -e- と -ur- が同じ許容態であることは、-ur- が -e- で表現されるようになってからも意味に変化がなかったことから確かめられます。

★態拡張動詞の1形語幹、2形語幹、3形語幹を例で示せば、次のようになります。

	開く → 開ける	起く → 起きる	時 代
1形語幹	ak-	ök-	前文献時1
2形語幹	ak-, ak;ë- (← ak;ay-)	ök-, ök;i- (← ök;öy-)	前文献時3(←2)
3形語幹	ak;Ø-, ak;e-, ak;ur-	ok;Ø-, ok;i-, ok;ur-	前文献時4～鎌倉
2形語幹	ak;e-, ak;ur-	ok;i-, ok;ur-	鎌倉～江戸前期
1形語幹	ak;e-	ok;i-	江戸後期～現代

表V3-7 原動詞の「態拡張」……新動詞を生む12の方式

方式	態変化		原自動詞	原他動詞
			態拡張	態拡張
[1]	無変化	原動詞のまま	[Z1] 自 Ø 自	[T1] 他 Ø 他
[2]	自他逆転	e で 自他逆転	[Z2] 自 e 他	[T2] 他 e 自
[3]	自他補強	e/i で 自他補強	[Z3] 自 e/i 自	[T3] 他 e/i 他
[4]	新自動詞形成(1)	ar で 新自動詞	[Z4] 自 ar 自	[T4] 他 ar 自
[5]	新自動詞形成(2)	are で 新自動詞	[Z5] 自 are 自	[T5] 他 are 自
[6]	新他動詞形成(1)	as で 新他動詞	[Z6] 自 as 他	[T6] 他 as 他
[7]	新他動詞形成(2)	ase で 新他動詞	[Z7] 自 ase 他	[T7] 他 ase 他
[8]	新他動詞形成(3)	se で 新他動詞	[Z8] 自 se 他	[T8] 他 se 他
[9]	対自原因(1)	as で 敬語動詞	[Z9] 自 as 自	[T9] 他 as 他
[10]	対自原因(2)	ase で 敬語動詞	[Z10] 自 ase 自	[T10] 他 ase 他
[11]	新自動詞形成(3)	aye で 新自動詞	[Z11] 自 aye 自	[T11] 他 (a)ye 自
[12]	非を格客体主体化	新動詞	[Z12] 自 ○ 自/他	[T12] 他 ○ 他/自

※方式[1]では、原動詞がそのまま変化せずに現代語動詞になっています。

※方式[1]の「0」は「態詞のないこと」を表します。

※方式[12]の「○」はいずれかの熊詞があることを表しています。

※方式[12]には比較的新しい現象もあります。

態を表す形態素

上の表の中に e, as, ar などの形態素が入っています。これらは「態」を表す「詞」で、つぎのように「態詞」とよぶことができます。(●印は基本の態を表します。)

- | | | | |
|------|-------|------------------|-------------------------|
| ●(1) | -e | 許容態詞 | -i-, -ur-, -Ø- の形もあります。 |
| ●(2) | -as- | 原因態詞 | -s- の形もあります。 |
| (3) | -as-e | 原因-許容態詞 (原因基) | -s-e- の形もあります。 |
| ●(4) | -ar- | 受影態詞 | |
| (5) | -ar-e | 受影-許容態詞 (受影基) | |
| ●(6) | -ay- | (古)許容態詞 | -y- の形もあります。 |
| (7) | -ay-e | (古)許容-許容態詞 (許容基) | -y-e- の形もあります。 |

12方式を例とともに

B9章

左ページの表の「原自動詞」と「原他動詞」の部分で動詞例とともに示します。
両ページの表は同じ色調の部分が対応しています。

表V3-8 動詞例……動詞の態拡張12方式

方式	原自動詞				原他動詞			
	記号	原自動詞	態	態拡張動詞	記号	原他動詞	態	態拡張動詞
[1]	[Z1]	自 ugok-	Ø	自 ugok-	[T1]	他 kudak-	Ø	他 kudak-
[2]	[Z2]	自 ak-	e	他 ak;e-	[T2]	他 kudak-	e	自 kudak;e-
[3]	[Z3]	自 mor-	e/i	自 mor;e-	[T3]	他 saduk-	e/i	他 saduk;e-
[4]	[Z4]	自 yasum-	ar	自 yasum;ar-	[T4]	他 atum-	ar	自 atum;ar-
[5]	[Z5]	自 uk-	are	自 uk;are-	[T5]	他 um-	are	自 um;are-
[6]	[Z6]	自 ugok-	as	他 ugok;as-	[T6]	他 sir-	as	他 sir;as-
[7]	[Z7]	自 urum-	ase	他 urum;ase-	[T7]	他 mot-	ase	他 mot;ase-
[8]	[Z8]	自 ni-	se	他 ni;se-	[T8]	他 mi-	se	他 mi;se-
[9]	[Z9]	自 tat-	as	自 tat;as-[敬]	[T9]	他 nuk-	as	他 nuk;as-
[10]	[Z10]	自 ir-	ase	自 ir;ase-[敬]	[T10]	他 kik-	ase	他 kik;ase-[敬]
[11]	[Z11]	自 sak-	aye	自 sak;aye-	[T11]	他 mi-	(a)ye	自 mi;ye-
[12]	[Z12]	自 nak-	○	自/他 nak;e-	[T12]	他 saduk-	○	他/自 saduk;ar-

※「ak;e-ru」のような記号「;」は、-e- のような態詞が語幹化した(語幹の中に入った)ことを意味しています(本書p.44参照)。

1つの原動詞から複数の新しい動詞が生じる例を3つ挙げます。

sir- 知る → [T2] sir;e- (知れる), [T6] sir;as- (知らず), [T7] sir;as;e- (知らせる)
wak- 分く → [T3e] wak;e- (分ける), [T4] wak;ar- (分かる),
[T5] wak;ar;e- (別れる)
ok- 起く → [Z3i] ok;i- (起きる), [Z4] ok;or- (起こる), [Z6] ok;os- (起こす)

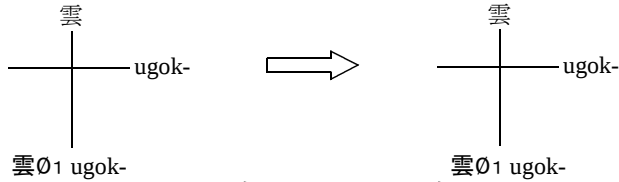
問V3-12 「抜く nuk-」という原動詞は、上のどの方式で態拡張していますか。
問V3-13 方式[2]と方式[3]の e の場合は同じようですが、何が違うのですか。
問V3-14 方式[6]と方式[9]は同じようですが、何が違うのですか。
問V3-15 方式[7]と方式[10]は同じようですが、何が違うのですか。

V3.2 12方式の[1]

無変化

「無変化」も態拡張の1つと位置づけます。

Z1 [自 Ø 自] 原自動詞に何も付かず、そのまま現代語の自動詞になります。



図V3-14 原自動詞 → 現代語自動詞

表V3-9 [自 Ø 自] の推移表

		ugok- (動く)				
		連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
推 定	前文献時1	ugok-i	ugok-u	ugok-u	ugok-ë	ugok-i=a
	前文献時2					ugok-e
	前文献時3					
	前文献時4					
以下、文献記録時代						
1 語 幹	奈良時代	ugok-i	ugok-u	ugok-u	ugok-ë	ugok-e
	平安時代				ugok-e	
	鎌倉時代					
	室町時代					
	江戸・前期					
	江戸・後期					
	現代	ugok-i	ugok-u	ugok-u	(なし)	ugok-e

四段(五段)活用

[Z1の原自動詞例]

開く ak-, 遊ぶ asob-, 動く ugok-, 勝つ kat-, 帰る kaher-, 咲く sak-,
 去る sar-, 住む sum-, 飛ぶ tob-, 泣く nak-, 成る nar-, 乗る nor-,
 降る hur-, 行く yuk-/ik-

[母音i末動詞] 似る ni-, 居る wi-

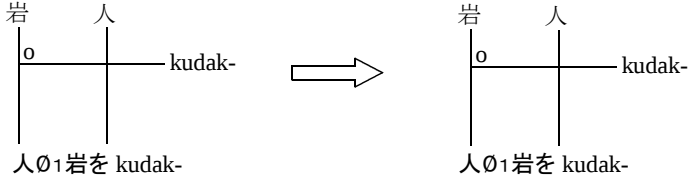
表V3-10 似る ni- の活用

	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
奈良時代	ni-Øi	ni-ru	ni-ru	ni-re	ni-yō
現 代	ni-Øi	ni-ru	ni-ru	(なし)	ni-ro

問V3-16 現代語の已然形はないのですか。仮定形になったのではないですか。

※下表中の「前文献時」は奈良時代より前の文献のない時代を意味し、「前文献時1～4」は便宜的な時代区分です。「前文献時」の語形は推測に基づくもので、実証できません。

T1 [他 Ø 他] 原他動詞に何も付かず、そのまま現代語の他動詞になります。



図V3-15 原他動詞 → 現代語他動詞

表V3-11 [他 Ø 他] の推移表

原他動詞		kudak- (砕く)				
		連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
推 定	前文献時1	kudak-i	kudak-u	kudak-u	kudak-ë	kudak-i=a
	前文献時2					kudak-e
	前文献時3					
	前文献時4					
以下、文献記録時代						
1 語 幹	奈良時代	kudak-i	kudak-u	kudak-u	kudak-ë	kudak-e
	平安時代				kudak-e	
	鎌倉時代					
	室町時代					
	江戸・前期					
	江戸・後期					
	現代	kudak-i	kudak-u	kudak-u	(なし)	kudak-e

四段(五段活用)

[T1の原他動詞例]

打つ ut-, 置く ok-, 押す os-, 書く kak-, 買ふ kah-, 聞く kik-,
砕く kudak-, 敷く sik-, 畳む tatam-, 継ぐ tug-, 摘む tum-, 取る tor-,
飲む nom-, 拾ふ hiroh-, 読む yom-, 折る wor-

[母音i末動詞] 射る i-, 着る ki-, 煮る ni-, 見る mi-

表V3-12 着る ki- の活用

	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
奈良時代	ki-Øi	ki-ru	ki-ru	ki-re	ki-yö
現代	ki-Øi	ki-ru	ki-ru	(なし)	ki-ro

※[Z1] [T1] の自他共通原動詞例 (Z1とT1の両方に入ります。) 絡む karam-,
注ぐ sosok(g)-, 積む tum-, 開く hirak-, 吹く huk-, 増す mas-, 笑ふ warah-

V3.2 12方式の[2]

-e- (許容態, -ur-や-Ø-の形も)で自他逆転。

Z2

[自 e 他] 原自動詞に許容態詞 e が付いて他動詞になります。



表V3-13 [自 e 他] の推移表

原自動詞		ak- (開く)					
		連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	
推 定	前文献時1	ak-i	ak-u	ak-u	ak-ë	ak-i=a	
	前文献時2	ak-ay-i				ak-ay-i=a	
	前文献時3	ak;ë-Ø				ak;ë-yō	
	前文献時4		ak;Ø-u	ak;ur-u	ak;ur-e		
以下, 文献記録時代							
3 語 幹	奈良時代	ak;ë-Ø	ak;Ø-u	ak;ur-u	ak;ur-e	ak;ë-yō	下 二 段 活 用
	平安時代	ak;e-Ø				ak;e-yo	
	鎌倉時代						
2 語 幹	室町時代		ak;ur-u				
	江戸・前期						
1 語 幹	江戸・後期					ak;e-ro	下 一 活
	現代	ak;e-Ø	ak;e-ru	ak;e-ru	(なし)		

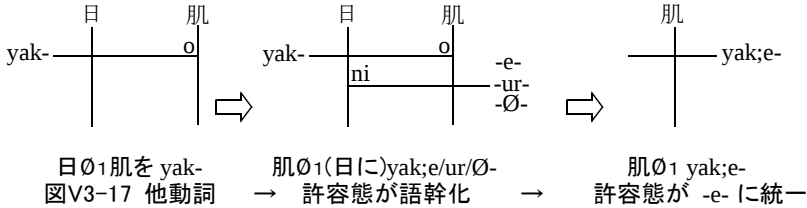
[Z2の原自動詞例]

開く ak-, 赤む akam-, 生く ik-, 痛む itam-, 入る ir-, 浮かぶ ukab-,
 浮く uk-, 霞む kasum-, 絡む karam-, 沈む sidum-, 育つ sodat-,
 添ふ soh-, 染む som-, 立つ tat-, 垂る tar-, 撓む tawam-, 付く tuk-,
 伝ふ tutah-, 続く tuduk-, 詰む tum-, 整ふ totonoh-, 並ぶ narab-,
 伸ぶ nob-, 伏す hus-, 触る hur-, 満つ mit-, 向く muk-, 休む yasum-,
 止む yam-, 歪む yugam-, 寄す yos-

問V3-17 「開く ak-」は Z1 にもありますが, これはどういふことですか。

問V3-18 そのような動詞はほかにもありますか。

T2) [他 e 自] 原他動詞に許容態詞 e が付いて自動詞になります。



表V3-14 [他 e 自] の推移表

原形動詞		yak- (焼く)				
		連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
推 定	前文献時1	yak-i	yak-u	yak-u	yak-ē	yak-i=a
	前文献時2	yak-ay-i				yak-ay-i=a
	前文献時3	yak;ē-Ø				yak;ē-yō
	前文献時4		yak;Ø-u	yak;ur-u	yak;ur-e	
以下，文献記録時代						
3 語 幹	奈良時代	yak;ē-Ø	yak;Ø-u	yak;ur-u	yak;ur-e	yak;ē-yō yak;e-yo
	平安時代	yak;e-Ø				
	2 語 幹	鎌倉時代	yak;ur-u			
室町時代						
1 語 幹	江戸・前期	yak;e-Ø	yak;e-ru	yak;e-ru	(なし)	yak;e-ro
	江戸・後期					
	現代	yak;e-Ø	yak;e-ru	yak;e-ru	(なし)	

[T2の原他動詞例]

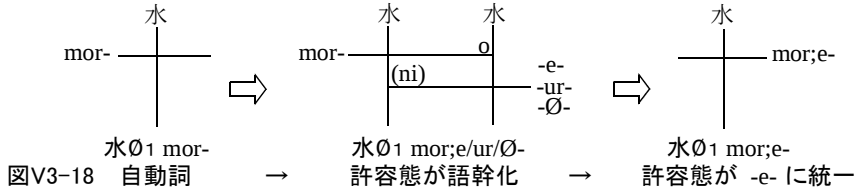
受く uk-, 売る ur-, 切る kir-, 砕く kudak-, 裂く sak-, 知る sir-,
詰む tum-, 釣る tur-, 解く tok-, 抜く nuk-, 剥ぐ hag-, 開く hirak-,
乱る midar-, 焼く yak-, 破る yabur-, 破る yar-, 寄す yos-,
読む yom-, 割る war-, 折る wor-

- ★ここにできた自動詞は、自然生起の意味を持つことが多いです。
- ★「切れる kir-e-」のように、kir-の動作者が意識されないものも多いです。
- ★動作者に意志がある場合、たとえば「固いけど **kir-e-ru**」の -e- は「可能」の意味になります。この -e- は多くの動詞で使える「許容態」なので、語幹化したものと考えないことにします。(比較参考) 自然に kir:e-ru (語幹化、自動詞)

V3.2 12方式の[3]

-e- / -i- (許容態, -ur-や-Ø-の形も)で自他補強。

Z3e [自 e 自] 原自動詞が許容態詞 **e** により補強されて、自動詞のまま。
 対自許容で、主体と態主体は同じ。(ni)は表現されません。



表V3-15 [自 e 自] の推移表

原自動詞		mor- (漏る)								
		連用形	終止形	連体形	已然形	命令形				
推 定	前文献時1	mor-i	mor-u	mor-u	mor-e	mor-i=a				
	前文献時2	mor-ay-i				mor-ay-i=a				
	前文献時3	mor;e-Ø	mor;Ø-u	mor;ur-u	mor;ur-e	mor;e-yō				
	前文献時4									
以下，文献記録時代										
3 語 幹	奈良時代	mor;e-Ø	mor;Ø-u	mor;ur-u	mor;ur-e	mor;e-yō mor;e-yo	下 二 段 活 用			
	平安時代									
	鎌倉時代		mor;ur-u							
2 語 幹	室町時代									
	江戸・前期									
1 語 幹	江戸・後期	mor;e-Ø	mor;e-ru	mor;e-ru	(なし)	mor;e-ro	下 一 活			
	現代									

[Z3e の原自動詞例] 「#」については右ページ上参照。

明く ak-, 溢る abur-, 荒る ar-, 出づ id-, 癒ゆ iy-, # 恐る osor-,
 # 隠る kakur-, 枯る kar-, 消ゆ kiy-, 暮る kur-, 焦ぐ kog-,
 肥ゆ koy-, 冷む sam-, # 逸る sor-, 絶ゆ tay-, # 垂る tar-,
 勤む tutom-, 流る nagar-, 逃ぐ nig-, 寝 n-, 馳す has-, 果つ hat-,
 撥ぬ han-, 映ゆ hay-, 晴る har-, 経 h-, 更く huk-, # 臥す hus-,
 # 触る hur-, 負く mak-, # 漏る mor-

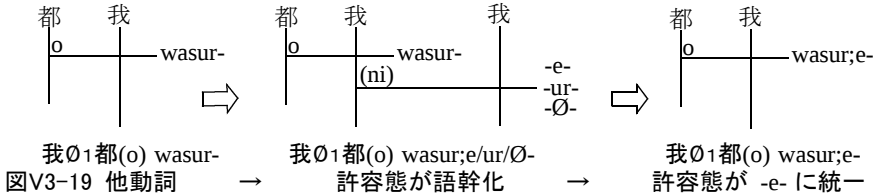
問V3-19 「出づ id-」はどのようにして現代語の「出る de-」になりましたか。

問V3-20 「流るる水」と「流れる水」について説明してください。

★「#」は奈良時代でも前文献時1の子音語幹が残っていたことを表します。

国語文法的に言えば、「漏る」や「忘る」に四段活用と下二段活用がありました。

T3e [他 e 他] 原他動詞が許容態詞 **e** により補強されて、他動詞のまま。
対自許容で、主体と態主体は同じ。(ni)は表現されません。



表V3-16 [他 e 他] の推移表

原他動詞		wasur- (忘る)				
		連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
推 定	前文献時1	wasur-i	wasur-u	wasur-u	wasur-e	wasur-i=a
	前文献時2	wasur-ay-i				wasur-ay-i=a
	前文献時3	wasur;e-Ø				wasur;e-yō
	前文献時4		wasur;Ø-u	wasur;ur-u	wasur;ur-e	
以下，文献記録時代						
3 語 幹	奈良時代	wasur;e-Ø	wasur;Ø-u	wasur;ur-u	wasur;ur-e	wasur;e-yō
	平安時代					wasur;e-yo
	2 語 幹		鎌倉時代			wasur;ur-u
室町時代						
1 語 幹	江戸・前期					wasur;e-ro
	江戸・後期					
	現代					

[T3eの原他動詞例] 「#」については、このページ上参照。

上ぐ ag-, 預く aduk-, 植う uw-, 受く uk-, 棄つ ut-, #埋む udum-,
 埋む um-, 憂ふ ureh-, #掠む kasum-, 替ふ kah-, 加ふ kuhah-,
 #包む kurum-, 超ゆ koy-, #離く sak-, 下ぐ sag-, 授く saduk-,
 鎮む sidum-, 捨つ sut-, 据う suw-, 束ぬ tukan-, 告ぐ tug-,
 繋ぐ tunag-, 遂ぐ tog-, 止む tom-, 馳す has-, 撥ぬ han-,
 #含む hukum-, 曲ぐ mag-, 愛づ med-, 求む motom-, 茹づ yud-,
 #分く wak-, #忘る wasur-

問V3-21 #「含む」は現代語でも、hukum- と hukum;e- の使い方がありますか。

児 $\bar{o}k$ $\rightarrow$ 児 $\bar{o}k$; $i/ur/\bar{o}$ $\rightarrow$ 児 $\bar{o}k;i$

図V3-20 自動詞 $\rightarrow$ 許容態が語幹化 $\rightarrow$ 許容態が $-i$ に統一

原自動詞		ök- (起く)				
		連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
推定	前文献時1	ök-i	ök-u	ök-u	ök-ë	ök-i=a
	前文献時2	ök-öy-i				ök-öy-i=a
	前文献時3	ök;i-Ø	ök;Ø-u	ök;ur-u	ök;ur-e	ök;i-yō
	前文献時4					
以下、文献記録時代						
3語幹	奈良時代	ök;i-Ø	ök;Ø-u	ök;ur-u	ök;ur-e	ök;i-yō ök;i-yo
	平安時代		ök;i-Ø	ök;ur-u	ök;ur-e	
2語幹	鎌倉時代		ök;ur-u			
	室町時代					
	江戸・前期					
1語幹	江戸・後期	ök;i-Ø	ök;i-ru	ök;i-ru	(なし)	ök;i-ro
	現代					

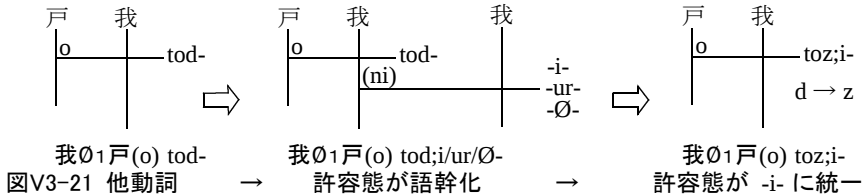
荒ぶ arab-, # 生く ik-, 起く ok-, 落つ ot-, 生ふ oh-, 老ゆ oy-,
下る or-, 朽つ kut-, 悔ゆ kuy-, 懲る kor-, 過ぐ sug-, # 足る tar-,
尽く tuk-, 閉づ tod-, 伸ぶ nob-, 恥づ had-, # 漬つ hit-, 干 h-,
綻ぶ hokorob-, # 滅ぶ horob-, # 満つ mit-,
紅葉つ momit- (→紅葉づ momid-)

問V3-22 「ちょっと足らない／足りない」の下線部の違いを説明してください。

問V3-23 「生く」はZ2にもありますが、意味の違いはありますか。

問V3-24 右ページの **tod:i-** は **tozi-i-** に変化しました。これはどういうことですか。

T3i **〔他 i 他〕** 原他動詞が許容態詞 iにより補強されて、他動詞のまま。対自許容で、主体と態主体は同じ。(ni)は表現されません。



表V3-18 [他 i 他] の推移表

原他動詞		tod-（閉づ）				
		連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
推 定	前文献時1	tod-i	tod-u	tod-u	tod-ë	tod-i=a
	前文献時2	tod-oy-i				tod-oy-i=a
	前文献時3	tod;i-Ø				tod;i-yō
	前文献時4		tod;Ø-u	tod;ur-u	tod;ur-e	
以下，文献記録時代						
3 語 幹	奈良時代	tod;i-Ø	tod;Ø-u	tod;ur-u	tod;ur-e	tod;i-yō tod;i-yo
	平安時代					
	鎌倉時代		tod;ur-u			
2 語 幹	室町時代					
	江戸・前期					
1 語 幹	江戸・後期					
	現代	toz;i-Ø	toz;i-ru	toz;i-ru	(なし)	toz;i-ro

上二段活用

上二活用

[T3i の原他動詞例]

恨む uram- (一時 uram;i- になりましたが、近世以後は uram-でした。)

閉づ tod- (「自他共通原動詞」なので[Z3i]にもあります。)

※帯ぶ ob- 「帯ぶ」は奈良時代では四段活用で、平安時代以降は上二段活用でした。推移の全体が時間的に遅れていました。

(※借る kar- 「借る」が kar;i-となるのは関東・東北地方の方言的な変化で、T3iの推移をしないでいきなり kar;i- となったようです。一応ここに含めておきます。)

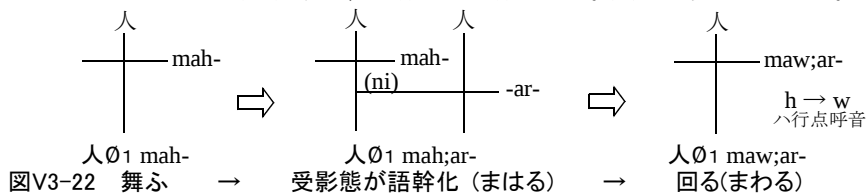
V3.2 12方式の[4]

受影態 -ar- で新自動詞を作ります。

Z4

[自 ar 自]

原自動詞が受影態詞 ar により新たな自動詞になります。
 対自受影で、主体と態主体は同じ。(ni)は表現されません。



表V3-19 [自 ar 自] の推移表

		mah- (舞ふ)				
		連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
推定	前文献時1	mah-i	mah-u	mah-u	mah-ë	mah-i=a
	前文献時2	mah;ar-i	mah;ar-u	mah;ar-u	mah;ar-e	mah;ar-i=a
	前文献時3					mah;ar-e
	前文献時4					
以下、文献記録時代						
1語幹	奈良時代	mah;ar-i	mah;ar-u	mah;ar-u	mah;ar-e	mah;ar-e
	平安時代					
	鎌倉時代					
	室町時代					
	江戸・前期					
	江戸・後期					
	現代	maw;ar-i	maw;ar-u	maw;ar-u	(なし)	mw;ar-e

四段(五段)活用

[Z4の原自動詞例]

絡む karam-, さく(栄) sak-, 沈む sidum-, 高む takam-, 縮む tidim-,
 伝ふ tutah-, 詰む tum-, 深む hukam-, 舞ふ mah-, 休む yasum-
 「詰む tum-」は「詰まる tum-ar-」のあとに出てきたようです。

-ar- の音転形 -or- によって新自動詞を形成する原自動詞例

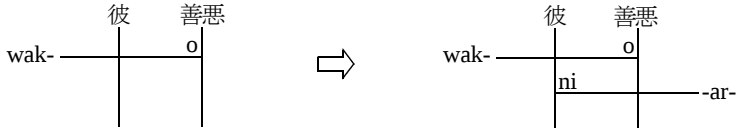
起く ok-, 籠む kom-, 積む tum-, 整ふ totonoh-

問V3-25 「舞ふ」と「回る」は、どういう意味関係でしたか。

問V3-26 右ページ上の「(善悪を) 分く wak-」は、どういう意味でしたか。

問V3-27 右ページ下の「掴む tukam-」は、なぜ特殊と思われるのですか。

T4 [他 ar 自] 原他動詞が受影態詞 ar により新たな自動詞になります。



図V3-23 彼の₁善悪を wak- (分く) → 受影態が語幹化 彼に善悪が₁ wak;ar- (分かる)
→本ページ最下参照

表V3-20 [他 ar 自] の推移表

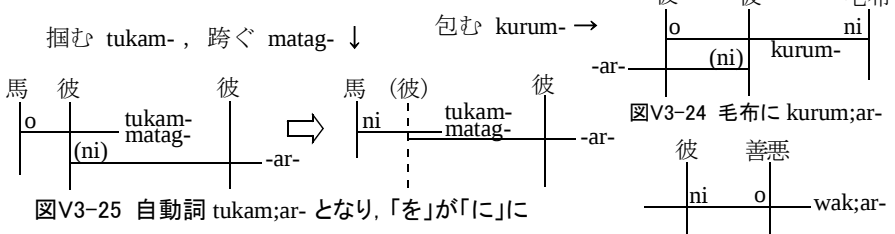
原他動詞		wak- (分く)				
		連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
推定	前文献時1	wak-i	wak-u	wak-u	wak-ë	wak-i=a
	前文献時2	wak;ar-i	wak;ar-u	wak;ar-u	wak;ar-e	wak;ar-i=a
	前文献時3					wak;ar-e
	前文献時4					
以下、文献記録時代						
1語幹	奈良時代	wak;ar-i	wak;ar-u	wak;ar-u	wak;ar-e	wak;ar-e
	平安時代					
	鎌倉時代					
	室町時代					
	江戸・後期					
	現代	wak;ar-i	wak;ar-u	wak;ar-u	(なし)	wak;ar-e

四段(五段)活用

[T4の原他動詞例]

上ぐ ag-, 集む atum-, 改む aratam-, 受く uk-, 埋む udum-,
埋む um-, 掛く kak-, 重ね kasan-, 絡む karam-, 授く saduk-,
捨つ sut-, 据う suw-, 繋ぐ tunag-, 止む tom-, 始む hazim-,
開く hadak-, 隔つ hedat-, 茹づ yud-, 分く wak-

特殊と思われるもの (原他動詞の対自受影)



図V3-25 自動詞 tukam;ar- となり、「を」が「に」に

図V3-24 毛布に kurum;ar-

「分かる」はさらに属性一体化により二重主語に。→ 図V3-26 彼が善悪が₁ wak;ar-

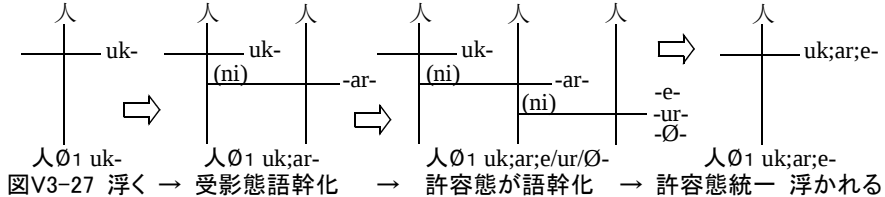
V3.2 12方式の[5]

受影基 -ar-e- により新自動詞を作ります。

許容態 -e- の部分は、-ur- や -Ø- の形もありました。

[Z5] [自 are 自] 原自動詞が are により新たな自動詞になります。

対自受影なので、それぞれの主体は同じです。



表V3-21 [自 are 自] の推移表

		原自動詞	uk- (浮く)				
			連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
推定	前文献時1	uk-i	uk-i	uk-u	uk-u	uk-ē	uk-i=a
	前文献時2	uk;ar-i	uk;ar-u	uk;ar-u	uk;ar-u	uk;ar-e	uk;ar-i=a
	前文献時3	uk;ar;e-Ø					uk;ar;e-yō
	前文献時4		uk;ar;Ø-u	uk;ar;ur-u	uk;ar;ur-e		
以下、文献記録時代							
3語幹	奈良時代	uk;ar;e-Ø	uk;ar;Ø-u	uk;ar;ur-u	uk;ar;ur-e	uk;ar;e-yō	下二段活用
	平安時代						
	鎌倉時代						
2語幹	室町時代		uk;ar;ur-u				下二活用
	江戸・前期						
1語幹	江戸・後期						
	現代	uk;ar;e-Ø	uk;ar;e-ru	uk;ar;e-ru	(なし)	uk;ar;e-ro	下二活用

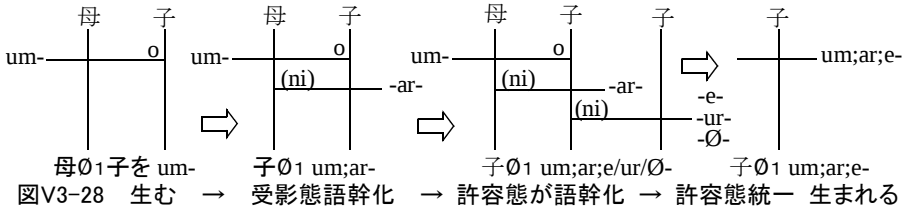
この「浮く」は「不安定な状態で、心理的に落ち着かぬさま」を意味します。みずから「浮く uk-」状態になる影響を当人が受け (-ar-)，それを当人が許容します (-e-)。現代語「浮かれる uk;ar;e-」では「楽しくてじっとしてられない気持ちになる」という意味です。

[Z5の原自動詞例]

浮く uk-, 焦ぐ kog-, 尽く(疲) tuk-, 逃ぐ nig- (nog-)

問V3-28 「疲れる」という語の構造を示してください。

T5 [他 are 自] 原他動詞が are により新たな自動詞になります。



表V3-22 [他 are 自] の推移表

原他動詞		um- (生む)				
		連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
推 定	前文献時1	um-i	um-u	um-u	um-ë	um-i=a
	前文献時2	um;ar-i	um;ar-u	um;ar-u	um;ar-e	um;ar-i=a
	前文献時3	um;ar;e-Ø	um;ar;Ø-u	um;ar;ur-u	um;ar;ur-e	um;ar;e-yö
	前文献時4					
以下、文献記録時代						
3 語 幹	奈良時代	um;ar;e-Ø	um;ar;Ø-u	um;ar;ur-u	um;ar;ur-e	um;ar;e-yö
2 語 幹	平安時代		um;ar;ur-u			
	鎌倉時代					
	室町時代					
江戸・前期						
1 語 幹	江戸・後期					um;ar;e-ro
	現代	um;ar;e-Ø	um;ar;e-ru	um;ar;e-ru	(なし)	

[T5の原他動詞例]

生む um-, 捨つ sut-, 剥ぐ hag-, 呼ぶ yob-, 分く wak-

(疑ふ utagah-, 偲ぶ sinob-, 待つ mat- 等は受影態[基]で使用されますが、ここに含めることも考えられます。)

-ar-e- の音転形 -or-e- によって新自動詞を形成する原他動詞例

埋む udum-, 埋む um-

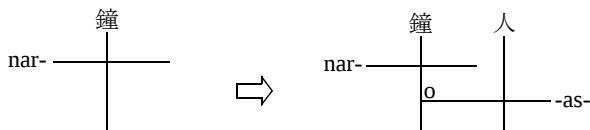
問V3-29 「呼ばれる」の受動の例と、T5の自動詞の例を示してください。

問V3-30 「別れる」というとき、wak- の主体は何ですか。

V3.2 12方式の[6]

原因態 -as- により新たな他動詞を作ります。

Z6 [自 as 他] 原自動詞が as により他動詞になります。

図V3-29 鐘の₁ nar- → 原因態が語幹化 人の₁鐘を nar;as-

表V3-23 [自 as 他] の推移表

原自動詞		nar- (鳴る)				
		連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
推定	前文献時1	nar-i	nar-u	nar-u	nar-e	nar-i=a
	前文献時2	nar;as-i	nar;as-u	nar;as-u	nar;as-e	nar;as-i=a
	前文献時3					nar;as-e
	前文献時4					
以下、文献記録時代						
1 語 幹	奈良時代	nar;as-i	nar;as-u	nar;as-u	nar;as-e	nar;as-e
	平安時代					
	鎌倉時代					
	室町時代					
	江戸・前期					
	江戸・後期					
	現代	nar;as-i	nar;as-u	nar;as-u	(なし)	nar;as-e

四段(五段)活用

[Z6の原自動詞例]

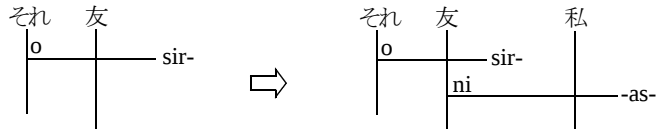
生く ik-, 出づ id-, 癒ゆ iy-, 動く ugok-, 驚く odorok-, 乾く kawak-,
 消ゆ kiy-, 朽つ kut-, 暮る kur-, 肥ゆ koy-, 冷む sam-, 覚む sam-,
 絶ゆ tay-, 垂る tar-, 散る tir-, 尽く tuk-, 費ゆ tuhiy-, 飛ぶ tob-,
 鳴る nar-, 慣る nar-, 逃ぐ nig-, 延ぶ nob-, 励む hagem-, 果つ hat-,
 生ゆ hay-, 晴る har-, 冷ゆ hiy-, 更く huk-, 触る hur-, 負く mak-,
 舞ふ mah-, 満つ mit-, 燃ゆ moy-, 漏る mor-, 沸く wak-

-as- の音転形 -os- / -us- で新他動詞を形成する原自動詞例

起く ok-, 落つ ot-, 及ぶ oyob-, 下る or-, 過ぐ sug-, 退く nok-,
 干 h-, 減ぶ horob- / 過ぐ sug-, 尽く tuk-

問V3-31 「消ゆ kiy-」は「消やす kiy-as-」でなく、「消す kes-」なのはなぜですか。

T6 [他 as 他] 原他動詞が as で新たな他動詞になるはずですが、要検討。



図V3-30 友の1それを sir- → 原因態が語幹化 私の1友にそれを sir;as-

※これは江戸時代前期にT7の -(s)as-e- から -e- が取れた形のようにです。本書p.94参照

表V3-24 [他 as 他] の推移表

原他動詞		sir- (知る)				
		連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
推定	前文献時1					
	前文献時2					
	前文献時3					
	前文献時4					
以下、文献記録時代						
1語幹	奈良時代					四段(五段)活用
	平安時代					
	鎌倉時代					
	室町時代					
	江戸・前期	sir;as-i	sir;as-u	sir;as-u	sir;as-e	
	江戸・後期					
	現代	sir;as-i	sir;as-u	sir;as-u	(なし)	

[T6の原他動詞例]

「聞く kik-」, 「知る sir-」で考えます。

「この曲聞かし kik;as-i て」「明日知らし sir;as-i て」はいずれも俗語的な感じがします。次の場合はどうでしょう。

「彼には聞かさない kik;as-ana.k-i で。だれにも知らさない sir;as-ana.k-i で来た。」

「この曲彼に聞かそうか kik;as-oo か。結果をいま知らそう sir;as-oo か。」

「これを彼に聞かす kik;as-u ことはない。彼に知らす sir;as-u ことはない。」

※「この曲聞かせ kik-as-e-Øi て」「明日知らせ sir-as-e-Øi て」のほうが正規の感じがしますが、これは[T7]による新動詞、あるいは、場合によっては動詞に原因基 -as-e- の付いた形と考えたほうがよいようです。本書p.94参照。

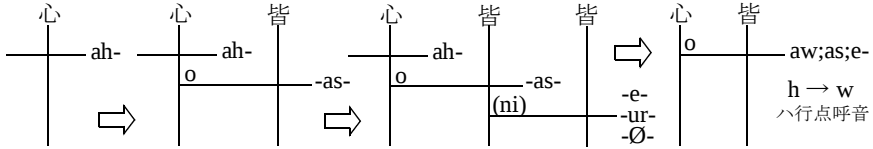
問V3-32 T9にも[他 as 他]がありますが、このT6との違いは何ですか。

V3.2 12方式の[7]

原因基 -as-e- により新他動詞を作ります。

[Z7] [自 ase 他] 原自動詞が ase により他動詞になります。

-e- (-ur-, -Ø-) は対自許容です。



心Ø1 ah- 皆Ø1心を ah;as- 皆Ø1心を ah;as;e/ur/Ø- 皆Ø1心を aw;as;e-

図V3-31 合ふ→原因態が語幹化 → 許容態が語幹化 → 許容態が統一 合わせる

表V3-25 [自 ase 他] の推移表

原自動詞		ah- (合ふ)						
		連用形	終止形	連体形	已然形	命令形		
推定	前文献時1	ah-i	ah-u	ah-u	ah-ë	ah-i=a		
	前文献時2	ah;as-i	ah;as-u	ah;as-u	ah;as-e	ah;as-i=a		
	前文献時3	ah;as;e-Ø				ah;as;e-yō		
	前文献時4		ah;as;Ø-u	ah;as;ur-u	ah;as;ur-e			
以下、文献記録時代								
3語幹	奈良時代	ah;as;e-Ø	ah;as;Ø-u	ah;as;ur-u	ah;as;ur-e	ah;as;e-yō ah;as;e-yo	下二段活用	
	平安時代							
	鎌倉時代							
2語幹	室町時代		ah;as;ur-u					
	江戸・前期							
1語幹	江戸・後期	aw;as;e-Ø			(なし)	aw;as;e-ro	下二活用	
	現代		aw;as;e-ru	aw;as;e-ru				

[Z7の原自動詞例]

合ふ ah-, 潤む urum-, 絡む karam-, 利く kik-, 騒ぐ sawag-,
 忍ぶ sinob-, 急く sek-, 添ふ soh-, 反る sor-, 轟く todorok-,
 泣く nak-, 悩む nayam-, 覗く nozok-, 響く hibik-, 参る mawir-

※「参る mawir-」は本来「参り+入る maw-i=ir-u」という形の連合動詞です。

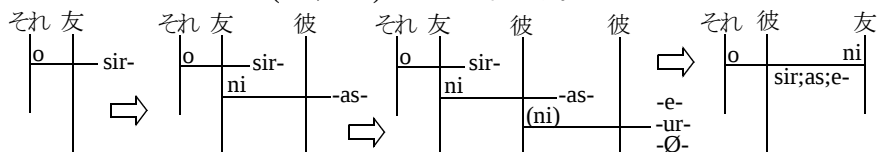
ここにできる「参らする mawir;as;ur-u」が省略されて「ます」ができました。

mawir;as;ur-u → mawir;as;ur-u → mawir;as;ur-u → mawir;as;ur-u → mawir;as;ur-u
 まゐらする まゐらする まゐらする まゐらする まゐらする

許容態 -e- の部分は, -ur- や -Ø- の形もありました。

T7 [他 ase 他] 原他動詞が ase により新たな他動詞になります。

-e- (-ur-, -Ø-) は対自許容です。



友Ø₁それを sir- 友にそれを sir;as- 友にそれを sir;as;e/ur/Ø- 友にそれを sir;as;e-
 図V3-32 知る→原因態が語幹化 → 許容態が語幹化 → 許容態が統一 知らせる

表V3-26 [他 ase 他] の推移表

原他動詞		sir- (知る)					
		連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	
推定	前文献時1	sir-i	sir-u	sir-u	sir-e	sir-i=a	
	前文献時2	sir;as-i	sir;as-u	sir;as-u	sir;as-e	sir;as-i=a	
	前文献時3	sir;as;e-Ø				sir;as;ur-u	sir;as;ur-e
	前文献時4		sir;as;Ø-u				
以下, 文献記録時代							
3語幹	奈良時代	sir;as;e-Ø	sir;as;Ø-u	sir;as;ur-u	sir;as;ur-e	sir;as;e-yō sir;as;e-yo	下二段活用
	平安時代						
	鎌倉時代		sir;as;ur-u				
室町時代							
2語幹	江戸・前期						
1語幹	江戸・後期		sir;as;e-Ø	sir;as;e-ru	sir;as;e-ru	(なし)	
	現代						

[T7の原他動詞例]

噛む kam-, 聞く kik-, 食ふ kuh-, 知る sir-, 掴む tukam-, 取る tor-,
 覗く nozok-, 任く mak-, 持つ mot-

[使用例] 「当時の様子を聞かせる kik;as;e-ru」(「話す」の意味の新動詞です。)

「殿様が家来に褒美を取らせる tor;as;e-ru」(意味は「与える」です。)

「書類は彼に任せる mak;as;e-ru」(「任く」からできた新動詞です。)

問V3-33 「のぞかせる」の他動詞と原因基での使用例を示してください。

問V3-34 「持たせる」の他動詞と原因基での使用例を示してください。

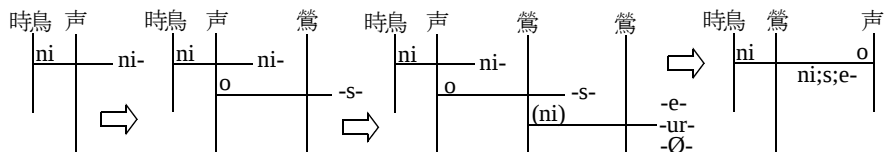
V3.2 12方式の[8]

原因基 -s-e- により新他動詞を作ります。

許容態-e-の部分は、-ur-や-Ø-の形もありました。

Z8 [自 se 他] 原自動詞が se により他動詞になります。

-e- (-ur-, -Ø-) は対自許容です。



声01時 鳥に ni- 声を時鳥に ni;s- 鶯01声を時鳥に ni;s;e/ur/Ø- 声を時鳥に ni;s;e-
 図V3-33 似る→原因態が語幹化 → 許容態が語幹化 → 許容態が統一 似せる

表V3-27 [自 se 他] の推移表

原自動詞		ni- (似る)					
		連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	
推定	前文献時1	ni-Ø	ni-ru	ni-ru	ni-re	ni-Ø=a	
	前文献時2	ni;s-i	ni;s-u	ni;s-u	ni;s-e	ni;s-i=a	
	前文献時3	ni;s;e-Ø		ni;s;ur-u	ni;s;ur-e	ni;s;e-yō	
	前文献時4						
以下，文献記録時代							
3語幹	奈良時代	ni;s;e-Ø	ni;s;Ø-u	ni;s;ur-u	ni;s;ur-e	ni;s;e-yō ni;s;e-yo	下二段活用
	平安時代						
	鎌倉時代		ni;s;ur-u				
2語幹	室町時代						
	江戸・前期						
1語幹	江戸・後期		ni;s;e-ro			(なし)	
	現代	ni;s;e-Ø		ni;s;e-ru			

[Z8の原自動詞例]

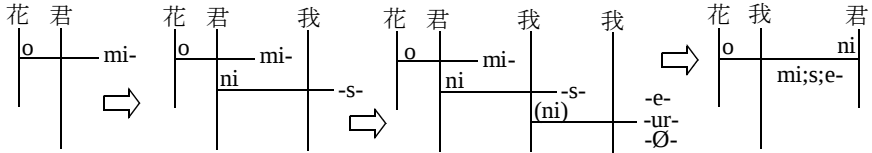
似る ni-

「似る ni-」は態拡張による大量の母音末動詞が生まれる前から存在していた母音末動詞です(B8.3⑦)。原因態は-as-ではなく、-s- で付きました。

問V3-35 「寝る」「寝せる」「寝させる」の構造と意味の違いを示してください。

T8 [他 se 他] 原他動詞が se により新他動詞になります。

-e- (-ur-, -Ø-) は対自許容です。



君の1花を mi- 我の1花を君に mi;s- 我の1花を君に mi;s;e-/ur-/Ø- 我の1花を君に mi;s;e-
 図V3-34 見る→原因態が語幹化 → 許容態が語幹化 → 許容態が統一 見せる

表V3-28 [他 se 他] の推移表

原他動詞		mi- (見る)				
		連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
推 定	前文献時1	mi-Ø	mi-ru	mi-ru	mi-re	mi-Ø=a
	前文献時2	mi;s-i	mi;s-u	mi;s-u	mi;s-e	mi;s-i=a
	前文献時3	mi;s;e-Ø				mi;s;e-yō
	前文献時4		mi;s;Ø-u	mi;s;ur-u	mi;s;ur-e	
以下，文献記録時代						
3 語 幹	奈良時代	mi;s;e-Ø	mi;s;Ø-u	mi;s;ur-u	mi;s;ur-e	mi;s;e-yō mi;s;e-yo
	平安時代					
	鎌倉時代		mi;s;ur-u			
2 語 幹	室町時代					
	江戸・前期					
1 語 幹	江戸・後期					mi;s;e-ro
	現代	mi;s;e-Ø	mi;s;e-ru	mi;s;e-ru	(なし)	

下二段活用

下二活用

[T8の原他動詞例]

着る ki-, 見る mi-

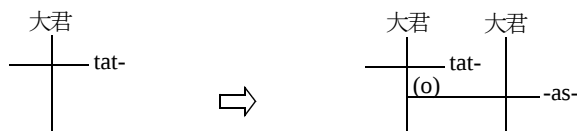
「着る ki-」も「見る mi-」も態拡張による大量の母音末動詞が生まれる前から存在していた母音末動詞です(B8.3⑦)。これらには原因態は-as-ではなく、-s- で付きました。

問V3-36 「着る」「着せる」「着させる」の構造と意味の違いを示してください。

V3.2 12方式の[9]

原因態 -as- により敬語動詞や非敬語動詞を作ります。

- Z9** [自 as 自] 原自動詞が as により敬語自動詞になります。
 -as-は対自原因です。自分が自分を使役する形の敬語です。



図V3-35 大君の₁ tat- 立つ → 原因態が語幹化 大君の₁ tat;as- 立たす
 (大君の₁おでかけになる)

表V3-29 [自 as 自] の推移表

		tat- (立つ)				
		連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
推定	前文献時1	tat-i	tat-u	tat-u	tat-e	tat-i=a
	前文献時2	tat;as-i	tat;as-u	tat;as-u	tat;as-e	tat;as-i=a
	前文献時3					tat;as-e
	前文献時4					
以下、文献記録時代						
1語幹	奈良時代	tat;as-i	tat;as-u	tat;as-u	tat;as-e	tat;as-e
	平安時代					
	鎌倉時代					
	室町時代					
	江戸・前期					
	江戸・後期			なし		
	現代					

四段(五段)活用

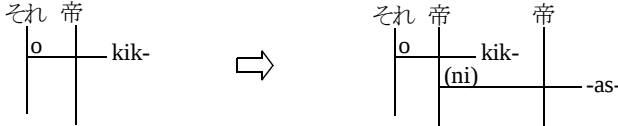
[Z9の原自動詞例]

立つ tat-, 寝(ぬ) n-

- ★「寝す n-as-u」は「おやすみになる」の意。尊敬自動詞。
 「寝す n-as-u」はZ6では他動詞。「安眠し寝さぬ n-as-an-u (安眠を寝させない)」
 「寝る n-e-ru」はZ3e。[自 e 自]
- ★ -as- が -os- と音転する動詞
 思ふ omoh- → 思ほす omoh-os- 「お思いになる」
 これがさらに「おぼす」に omoh-os- → omh-os- → omb-os- → ob-os-

問V3-37 右ページ関連。「1人抜いて/抜かして数えた」の構造の違いは何ですか。

- T9** 【他 as 他】 原他動詞が as により敬語他動詞や非敬語他動詞になります。
-as-は対自原因です。自分が自分の動作の原因となります。



図V3-36 帝の1それを kik- → 原因態が語幹化 帝の1それを kik;as-
(帝の1それをお聞きになる)

表V3-30 【他 as 他】 の推移表

原他動詞		kik- (聞く)				
		連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
推定	前文献時1	kik-i	kik-u	kik-u	kik-ë	kik-i=a
	前文献時2	kik;as-i	kik;as-u	kik;as-u	kik;as-e	kik;as-i=a
	前文献時3					kik;as-e
	前文献時4					
以下、文献記録時代						
1語幹	奈良時代	kik;as-i	kik;as-u	kik;as-u	kik;as-e	kik;as-e
	平安時代					
	鎌倉時代					
	室町時代					
	江戸・前期					
	江戸・後期					
	現代	tok;as-i	tok;as-u	tok;as-u	(なし)	tok;as-e

敬語・非敬語他動詞

非敬語他動詞のみ

四段(五段)活用

江戸後期と現代には、この敬語他動詞はなく、非敬語他動詞のみ存在。

【T9の原他動詞例】

聞く kik-

- ★ -as- が -os- と音転する動詞 …… 織る or- → or-os-
聞く kik- → kik-os-, 知る sir- → sir-os- (治める)
- ★ i-as- / y-as が -es- と音転する動詞 …… 着る ki- ki-as-u → kes-u
見る mi- mi-as-u → mes-u, 為^(す) (推定形 sy-, sy-as- → ses-)
- ★ -as- の a が消失する動詞 …… 見る mi- → mi;s-u

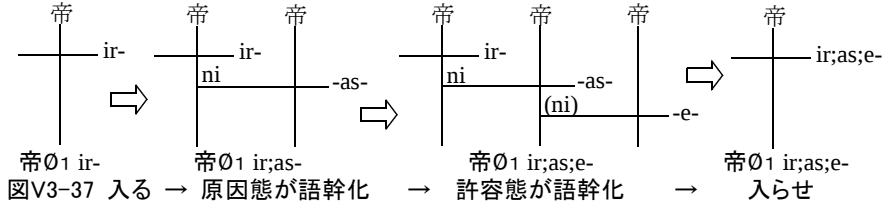
非敬語他動詞になる例

欠く kak-, 切る kir-, 溶く tok-, 梳く tok-, 抜く nuk-, 剥ぐ hag-

V3.2 12方式の[10]

原因基 -as-e- により敬語動詞を作ります。

[Z10] 〔自 ase 自〕 原自動詞が ase により敬語自動詞になります。
 -as-, -e-はともに対自です。



表V3-31 〔自 ase 自〕の推移表

		ir- (入る)				
		連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
推定	前文獻時1	ir-i	ir-u	ir-u	ir-e	ir-i=a
	前文獻時2	ir;as-i	ir;as-u	ir;as-u	ir;as-e	ir;as-i=a
	前文獻時3					ir;as-e
	前文獻時4					
以下、文献記録時代						
1語幹	奈良時代	ir;as-i	ir;as-u	ir;as-u	ir;as-e	ir;as-e
	平安時代	ir;as;e-Ø				
	鎌倉時代					
	室町時代					
	江戸・前期			なし		
	江戸・後期					
	現代					

下一段活用

[Z10の原自動詞例] 入る ir-

★この -as-e- は奈良時代の敬語形式 -as- (方式[9])にとってかわる平安時代以降の形式で、語幹と連用形の使用が確認されています。(許容態が語幹化しました。)

★[尊敬]では、貴人が自らを使役します。

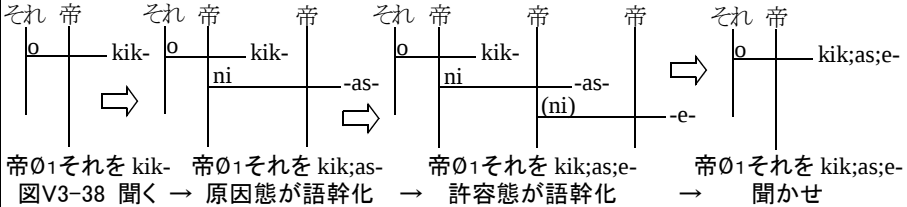
受影(尊敬)の「らる -rar-」とともに用いられました。「入らせらる ir-as-e-rar-u」

これに-mas-が付いた ir-as-e-rar-i=mas-u が「いらっしゃいます」になりました。V1.8 連用形が「給ふ」とともに用いられることもあります。

入らせ ir-as-e-Ø 給ひても (お入りになっても)

【T10】 [他 ase 他] 原他動詞が ase により敬語他動詞になります。

-as-, -e-はともに対自です。



表V3-32 [他 ase 他] の推移表

	原他動詞	kik- (聞く)				
		連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
推 定	前文献時1	kik-i	kik-u	kik-u	kik-ē	kik-i=a
	前文献時2	kik;as-i	kik;as-u	kik;as-u	kik;as-e	kik;as-i=a
	前文献時3					kik;as-e
	前文献時4					
以下、文献記録時代						
1 語 幹	奈良時代	kik;as-i	kik;as-u	kik;as-u	kik;as-e	kik;as-e
	平安時代	kik;as;e-Ø				
	鎌倉時代					
	室町時代					
	江戸・前期					
	江戸・後期					
	現代					

な し

下一段活用

[T10の原他動詞例] 聞く kik-

これを聞かせ 給ひて ……お聞きになって

★[謙讓]では、当人が貴人のために自らを使役します。

これ奉らせむ tatematur-as-e-mu (これを差し上げます)

★この方式[10]の **-as-e-** は原因基(態) (国語学では「助動詞」)としての使い方がほとんどで、語幹化しているのは例外的でした。(語幹化については本書p.44参照)

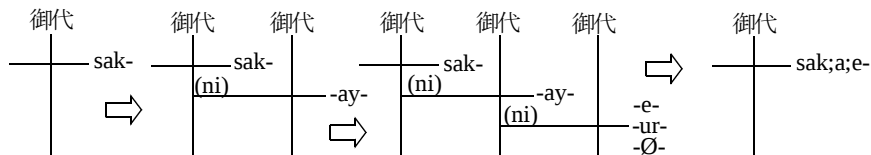
V3.2 12方式の[11]

原因基 -ay-e- により新自動詞を作ります。

許容態-e-の部分は、-ur-や-Ø-の形もありました。

[Z11] [自 aye 自] 原自動詞が aye により新自動詞になります。

-ay-, -e-はともに対自です。



御代Ø1 sak- 御代Ø1 sak;ay- 御代Ø1 sak;ay;e/ur/Ø- 御代Ø1 sak;a;e-

図V3-39 さく→許容態1が語幹化 → 容態態2が語幹化 → 許容態が統一 栄える

表V3-33 [自 aye 自] の推移表

原自動詞		sak- (さく)					
		連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	
推 定	前文献時1	sak-i	sak-u	sak-u	sak-ë	sak-i=a	
	前文献時2	sak;ay-i	sak;ay-u	sak;ay-u	sak;ay-ë	sak;ay-i=a	
	前文献時3	sak;ay;ë-Ø	sak;ay;Ø-u	sak;ay;ur-u	sak;ay;ur-e	sak;ay;ë-yō	
	前文献時4						
以下，文献記録時代							
3 語 幹	奈良時代	sak;a;ë-Ø	sak;ay;Ø-u	sak;ay;ur-u	sak;ay;ur-e	sak;a;ë-yō	下 二 段 活 用
	平安時代	sak;a;e-Ø	sak;ay;ur-u			sak;a;e-yo	
	鎌倉時代						
2 語 幹	室町時代						下 一 活
	江戸・前期						
1 語 幹	江戸・後期					sak;a;e-ro	
	現代	sak;a;e-Ø	sak;a;e-ru	sak;a;e-ru	(なし)		

[Z11の原自動詞例]

ある ar-, さく sak-

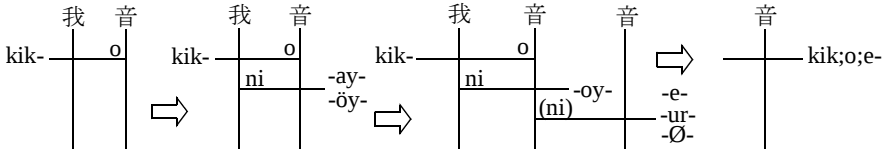
※「ある ar-」からは「あらゆる ar;ay;ur-u」の形ができました。

右ページの「嗅ぐ kag-」について

※ kag- からは「嗅がゆ kag;ay-u」という語ができましたが、kag;a;e-ru という現代語にはなりませんでした。「嗅ぐ」は、「聞く・見る」と異なり、嗅覚情報の存在する範囲が狭く、かなり意識的に行う行為になるからでしょう。

T11 [他 aye 自] 原他動詞が aye により新自動詞になります。

-ay-, -e-はともに対自です。



我の1音を kik- 我に音の1 kik;ay/öy- 我に音の1 kik;oy;e/ur/Ø- 音の1 kik;o;e-

図V3-40 聞く→ 許容態1が語幹化 → 許容態2が語幹化 → 許容態が統一 聞こえる

表V3-34 [他 aye 自] の推移表

原他動詞		kik- (聞く)					
		連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	
推 定	前文献時1	kik-i	kik-u	kik-u	kik-ē	kik-i=a	
	前文献時2	kik;ōy-i	kik;ōy-u	kik;ōy-u	kik;ōy-ē	kik;ōy-i=a	
	前文献時3	kik;oy;ē-Ø	kik;oy;Ø-u	kik;oy;ur-u	kik;oy;ur-e	kik;oy;ē-yō	
	前文献時4						
以下，文献記録時代							
3 語 幹	奈良時代	kik;o;ē-Ø	kik;oy;Ø-u	kik;oy;ur-u	kik;oy;ur-e	kik;o;ē-yō	下 二 段 活 用
	平安時代	kik;o;e-Ø	kik;oy;ur-u			kik;o;e-yo	
	鎌倉時代						
2 語 幹	室町時代						
	江戸・前期						
1 語 幹	江戸・後期					kik;o;e-ro	下 二 活 用
	現代	kik;o;e-Ø	kik;o;e-ru	kik;o;e-ru	(なし)		

[T11の原他動詞例]

言ふ ih-, 嗅ぐ kag-, 聞く kik-, 見る mi-

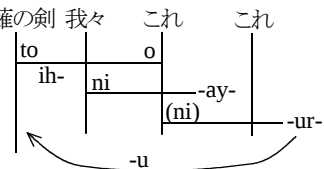
※ ih- からは「いわゆる iw;ay;ur-u」ができました。

これを草薙の剣と言ふ ih-u → いわゆる 草薙の剣

※ mi- は母音連続忌避のため mi;ay-u ではなく

mi;y-u に。そして, mi;y;e-ru から mi;e-ru に。

※ kag- については左ページに記載。

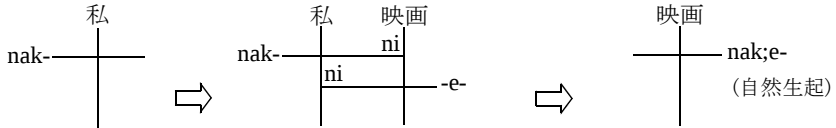


図V3-41 いわゆる iw-ay-ur-u

V3.2 12方式の[12]

o 格以外の客体を主体化して新動詞を作ります。

[Z12] [自○自/他] 原自動詞がある態構造により新動詞になります。



私の泣く → 許容態が語幹化 映画の私に泣ける → この映画の泣ける

図V3-42 o 格客体ではなく ni 格客体が許容主体になる

表V3-35 [自○自/他] の推移表

		nak- (泣く)				
		連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
推定	前文献時1					
	前文献時2					
	前文献時3					
	前文献時4					
以下、文献記録時代						
1語幹	奈良時代					四段(五段)活用
	平安時代					
	鎌倉時代					
	室町時代					
	江戸・前期					
	江戸・後期					
1幹	現代	nak;e-Ø	nak;e-ru	nak;e-ru		下

[Z12の原自動詞例]

泣く nak-, 笑う warah-

※古語にはなし。

「あの映画は泣ける nak-e-」と言うとき、「自然生起(自然に泣いてしまう)」と「可能(泣くことができる)」の2つがあります。構造は同じですが、意志が異なります。

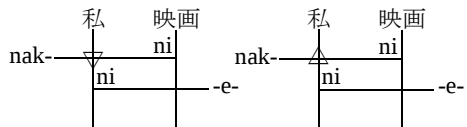
自然生起の「泣く」…泣く意志なし。

「泣ける nak;e-」は自動詞。

可能の「泣く」…泣く意志あり。

「泣ける nak-e-」は動詞の許容態形。

※記号▽△の意味は、S1.14参照。



図V3-43 自動詞と許容態形の「泣ける」

T12 [他〇他/自] 原他動詞がある態構造により新動詞になります。



神の1夫婦に子を受く 夫婦の1神に子を受かる 夫婦の1子を受かる
図V3-44 o格実体ではなく ni格実体が受影主体になる

★ o格実体の「子」が受影主体となると、「子が(夫婦に)授かる」となります([T4])。

表V3-36 [他〇他/自] の推移表

原他動詞		saduk- (授く)				
		連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
推定	前文献時1					
	前文献時2					
	前文献時3					
	前文献時4					
以下、文献記録時代						
	奈良時代					
	平安時代					
	鎌倉時代					
	室町時代					
1語幹	江戸・前期				saduk;ar-e	
	江戸・後期	saduk;ar-i	saduk;ar-u	saduk;ar-u		saduk;ar-e
	現代	sazuk;ar-i	sazuk;ar-u	sazuk;ar-u	(なし)	sazuk;ar-e

五段活用

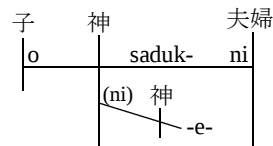
江戸・前期になって受影態が語幹化し、新動詞が生まれました。

[T12の原他動詞例]

預く aduk-, 教ふ wosih-, 授く saduk-

※教はる (w)osoh;ar- で si が so になっているのは a が広いからです(逆行同化)。

★「(神が夫婦に子を) 授ける saduk;e-」の場合は、神が対自許容態をとる構造になります。 → 教える wosih;e-, 預ける aduk;e- も同じです。(T3e 参照)



図V3-45 神が授ける saduk;e-

コラムV2

動詞(語幹)が2段階で統一

動詞(語幹)は、主要な変化である①と②では、鎌倉と江戸の2つの時代に統一への動きがありました。「かな」で考える国語学では、「活用の変化」として扱います。

表V2 動詞(語幹)の変化 (国語学でいう「活用の変化」)

	元の活用	現代語の活用	語例(現代語)	方式	参照
①	下二段活用	→ 下一段活用	開ける ak;e-	方式[2]	
②	上二段活用	→ 上一段活用	起きる ok;i-	方式[3]	
③	上一段活用	→ 上一段活用	見る mi-	方式[1]	
④	四段活用	↘	読む yom-	方式[1]	
⑤	ラ変活用	↘	ある ar-	方式[1]	本書p.87
⑥	ナ変活用	↘	死ぬ sin-	方式[3]	本書p.86
⑦	下一段活用	↘	蹴る ke;r-	方式[1]	
⑧	カ変活用	→ カ変活用	来る k;ur-	方式[3]	本書p.85
⑨	サ変活用	→ サ変活用	する s;ur-	方式[3]	本書p.84

時代的な変化なので、「時代のものさし(横)」を使うことにします(本書p.46参照)。

8c	9c	10c	11c	12c	13c	14c	15c	16c	17c	18c	19c	20c	21c
奈良		平安			鎌倉	室町			江戸			現代	

①では、鎌倉と江戸後期の2段階で動詞(語幹)の統一が進みました。方式[2]

図V2① 奈良 平安 | 鎌倉 | 室町 | | 江戸 | 現代

開ける ak;e-	ak;Ø-	(消滅)
	ak;ur-	(消滅)
	ak;ë-	ak;e- (これに統一)
	下二段活用	下一段活用

②でも、鎌倉と江戸後期の2段階で動詞(語幹)の統一が進みました。方式[3]

図V2② 奈良 平安 | 鎌倉 | 室町 | | 江戸 | 現代

起きる ok;i-	ök;Ø-	ok;Ø-	(消滅)
	ök;ur-	ok;ur-	(消滅)
	ök;i-	ok;i- (これに統一)	
	上二段活用	上一段活用	

問V3-38 上の①, ②での、鎌倉時代と江戸時代での変化を説明してください。

③の上一段活用には許容態が関わらず、動詞(語幹)はそのまま現代語に。方式[1]

図V2③	奈良	平安	鎌倉	室町	江戸	現代
見る mi-	mi-					上一段活用

④の四段活用も動詞(語幹)はそのままでしたが、江戸時代後期に描写詞に-oo が加わったので、「かな」表現で見て、「五段活用」とよばれるようになりました。

図V2④	奈良	平安	鎌倉	室町	江戸	現代
読む yom-	yom-					四段活用
						五段活用

⑤の動詞 ar-は、終止形の描写詞が -i だったためにラ変(ラ行変格)活用とよばれました。鎌倉・室町時代に他の動詞と同じ-u になりました。本書p.87参照

図V2⑤	奈良	平安	鎌倉	室町	江戸	現代
ある ar-	ar-					終止形描写詞 -i (ラ変活用)
						終止形描写詞 -u (四段・五段活用)

⑥の動詞 sin-は、sin;ur-という形が江戸時代後期に消えました。本書p.86参照

図V2⑥	奈良	平安	鎌倉	室町	江戸	現代
死ぬ sin-	sin;ur-					(消滅)
	sin-					(これに統一)
	ナ変(ナ行変格)活用					五段活用

⑦の動詞 ker-は古語唯一の e 末動詞でしたが、r を取り込み子音末になりました。

図V2⑦	奈良	平安	鎌倉	室町	江戸	現代
蹴る ke;r-	(kwe-) ke-					ke;r-
	(唯一の)下一段活用					五段活用

⑧⑨の動詞 k;ur-, s;ur- は動詞(語幹)形式が統一されていません。本書pp.84-85参照

図V2⑧	奈良	平安	鎌倉	室町	江戸	現代
来る k;ur-	k- / s-					
する s;ur-	k;ur- / s;ur-					
	ko- / si-					
	カ変(カ行変格)活用 / サ変(サ行変格)活用					

問V3-39 四段活用が五段活用になったのは動詞(語幹)が変化したからですか。

コラムV3

係り結び……待望の新終止形は倒置がきっかけで誕生

「係り結び」とは文を作るときに起こった法則的現象で、平安時代を中心に存在しました。次のように、3種類に整理されていますが、①②は特に「係り結び」とよぶ必要のないものです。国語学者の大野晋氏の考え方を参考に述べます。

①係りが「ハ、モ」のときは、結びは特に定めなし。(多くは終止形。)

花の₁ 咲く sak-u。 水₀₁ 流る nagar-u。(現代語 nagar;e-ru)

花の₁ハ咲く sak-u。 水₀₁ハ流る nagar-u。

花の₁モ咲く sak-u。 水₀₁モ流る nagar-u。

→ ハ、モは「とりたて」をしているだけで、現代語でも同じです。

②係りが「コソ」のときは、結びは已然形。

花の₁ 咲け sak-e, ……。 水₀₁ 流るれ nagar;ur-e, ……。

花の₁コソ咲け sak-e, ……。 水₀₁コソ流るれ nagar;ur-e, ……。

(花は咲くけれど、……。) (水は流れるけど、……。)

→ 「已然形」は奈良時代に順接・逆接を表していて、逆接の文にコソが入りました。つまり、もともと已然形があったところにコソが入ったわけで、コソが已然形を要求していたわけではありません。

ということは、この①②は特に「係り結び」とよぶ必要のないものです。

「係り結び」の現象は、次の③の、特にゾと力の倒置現象に由来します。

③係りが「ゾ、ナム、ヤ、力」のときは、結びは連体形。

◎花の₁ゾ 咲く sak-u。 水₀₁ゾ 流る nagar;ur-u。

花の₁ナム咲く sak-u。 水₀₁ナム流る nagar;ur-u。

花の₁ヤ 咲く sak-u。 水₀₁ヤ 流る nagar;ur-u。

◎花の₁力 咲く sak-u。 水₀₁力 流る nagar;ur-u。

ゾ(ソ)の使用された文はふつうはこうでした。(主部－述部)

あきづ島大和の国は うまし国ソ (ソ……「である」の意味)

これが、主部の強調のために倒置されて、こうなりました。

うまし国ソ あきづ島大和の国は (万葉2)

このような倒置のために、主部の体言(名詞…大和の国)が文末に来ることになりました。次のような場合には、主部の体言(名詞)相当の連体形(寝にける)が文末に来ることになりました。

春の野にすみれ摘みにと来し我ソ 野をなつかしみ^{ひとよ}一夜寝にける (万葉1424)

(すみれを摘みに来た私だ。野が去りがたくて一晩寝てしまった人)は。)

これと同じ、文末に体言相当の連体形が来ることは、力についても言えます。

照るべき月を 白たへの雲力 隠せる (万葉1079)

(白い布のような雲だろうか。照るはずの月を隠している〈もの〉は。)

これは、「(月を)隠せる(もの)は 白たへの雲力」の倒置として理解できます。

このように、倒置により、ゾ(ノ)とカの場合に、文末に連体形が置かれることになりました。これがきっかけとなって、倒置の機能がなかった、ナム、ヤもこれに従うようになりました。こうして、文を連体形で終止することが一般的となりました。まさに「係り結び」です。……しかし、その後、倒置の表現効果は徐々に消滅しました。

以上は大野氏の考え方です。この後は、自分で考えることになります。

前提として、次の〈1〉と〈2〉の2つのことを認識しておく必要があります。

〈1〉平安時代は許容態の語幹化した動詞は「終止形」が古いままでした。(方式[2]参照)

連用形などは、自動詞と他動詞が形で区別できるようになっていましたが、終止形はまだでした。それで、区別できるようになる機会をうかがっていました。

表コV3-1 平安時代の許容態語幹化動詞の終止形は古いまま(例:「砕く」)

	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
他動詞	砕き kudak-i	砕く kudak-u	砕く kudak-u	砕け kudak-e	砕け kudak-e
自動詞 (許容態形)	砕け kudak;e-Ø	砕く kudak;Ø-u	砕くる kudak;ur-u	砕くれ kudak;ur-e	砕けよ kudak;e-yo

表コV3-2 終止形は自他同形のまま(例:自動詞「立つ」、他動詞「砕く」)

自動詞	他動詞(許容態形)	他動詞	自動詞(許容態形)
波が <u>立つ</u> tat-u	波を <u>立つ</u> tat;Ø-u (「立てる」のつもり)	岩が波を <u>砕く</u> kudak-u	波が岩に <u>砕く</u> kudak;Ø-u (「砕ける」のつもり)

〈2〉日本語の子音末動詞では終止形(yom-u)と連体形(yom-u)が同形です。

許容態により新しくできた動詞は終止形(kudak;Ø-u)と連体形(kudak;ur-u)が異なる形でした。同じ形にしたかったのですが、きっかけがありませんでした。

この〈1〉〈2〉の状況下で、ゾとカの倒置用法から文末を連体形で終止することが始まりました。これは動詞にとってまたとないよい機会となったわけで、待望していた、連体形の形を新しい終止形(Ø → ur)とすることができるようになったのです。

表コV3-3 鎌倉時代の自動詞「砕くる」……終止形を連体形と同形にできた

	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
自動詞 (許容態形)	砕け kudak;e-Ø	砕くる kudak;ur-u	砕くる kudak;ur-u	砕くれ kudak;ur-e	砕けよ kudak;e-yo

問V3-40 「係り結び」といわれる現象のおかげで何が実現したのですか。

コラムV4

許容態の語幹化と形の統一

[T2]を例に

[許容態の語幹化] 推定

動詞の許容態拡張は段階的で、まず、態に敏感な、従属節の述語となる連用形に ;ë- という形で始まりました(本書pp.40-41)。連用形は命令形にも使われました。

表コV4-1 許容態の発生 語幹2種類 xxx;ë-(砕け), xxx-(砕く)

	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
自動詞形 (語幹2種類)	砕け kudak;ë-Ø	砕く kudak-u	砕く kudak-u	砕け kudak-e	砕けよ kudak;ë-yo
	自動詞形	まだ自他同形			自動詞形

次に、かなり時間をおいて、やはり従属節を形成して態に敏感な、連体形と已然形に ;ur- という形で起こりました(本書p.41)。

表コV4-2 許容態の進展 語幹3種類 xxx;ë-(砕け), xxx-(砕く), xxx;ur-(砕くる)

	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
自動詞形 (語幹3種類)	砕け kudak;ë-Ø	砕く kudak-u	砕くる kudak;ur-u	砕くれ kudak;ur-e	砕けよ kudak;ë-yo
	自動詞形	まだ自他同形	自動詞形		

奈良時代はこの状況が続いているときに始まりました。ë は平安時代に e に。

[許容態の完全語幹化] 鎌倉時代

鎌倉時代になってやっと、態には最も鈍感でよかった主文の述語である終止形が、係り結び現象をきっかけに、連体形と同じ;ur-の形を取るようになりました。

表コV4-3 許容態の完全語幹化 語幹2種類 xxx(砕け), xxx;ur-(砕くる)

	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
自動詞形 (語幹2種類)	砕け kudak;e-Ø	砕くる kudak;ur-u	砕くる kudak;ur-u	砕くれ kudak;ur-e	砕けよ kudak;e-yo
	自動詞形が2種類に (xxx;e- と xxx;ur-)				

[許容態の形の統一] 江戸時代・後期

江戸時代・後期に、許容態 ;ur- は短い形の ;e- に統一されました。

表コV4-4 許容態の統一 語幹1種類 xxx;e-(砕け)

	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
自動詞形 (語幹統一)	砕け kudak;e-Ø	砕ける kudak;e-ru	砕ける kudak;e-ru	(なし)	砕けろ kudak;e-ro
	自動詞形が1種類に (xxx;e-) (母音末動詞になる)				

問V3-41 このページに示された「変化」を簡単な表にすることができますか。